

自由と尊厳

(Philosophy Stack Exchange に投稿された質問「民主主義国家はどのような根拠でポルノを禁止できるのか？」への回答)

翻訳に関する注記

この文章はイタリア語と英語で書かれ、どちらのバージョンも私が直接編集しました。私の考えを忠実に反映していることを保証します。他の言語については、専門家による翻訳レビューを受ける機会がないため、Google 翻訳を使用しました。些細な誤りや不正確な点がありましたらお詫び申し上げます。Google 翻訳は非常に効率的なツールであり、読者の皆様にも安心してご利用いただけます。しかしながら、私の考えのニュアンスが十分に伝わっていない可能性もごございます。しかしながら、母国語でこれらの考察に関心を持つ読者の皆様を排除するよりも、不完全なバージョンを提供する方が望ましいと考えました。ご清聴ありがとうございました。どうぞお楽しみください。

民主主義国家がポルノを禁止できるかどうかという問題は、「民主主義」とは何かという点に大きく依存します。もし民主主義が単に多数派の専制であるならば、答えは明白です。多数派が望んでいるという理由だけで、それ以上の正当化や「根拠」を必要とせずにポルノを禁止できるのです。しかし、多数派が常に正義や賢明であるとは限りません。歴史は、集団的意思決定が深刻な不正行為につながった、痛ましい例を数多く残しています。結局のところ、イエスの磔刑を要求したのは王でも暴君でもなく、群衆の意志でした。そして、集団的な「美德」が個人を沈黙させる時、どれほど危険なものとなり得るかを、これほどよく示すものはありません。もちろん、禁酒主義者とイエスの磔刑を叫んだ群衆を道徳的に同一視するつもりはありません。ただ、歴史上繰り返されるパターン、すなわち大衆の道徳的謬性を示したいだけです。同様の力学は、歴史上の他の悲劇的なエピソードにも見られます。権力者は群衆の怒りやパニックを恐れ、正義のためではなく、自らの人気を維持するため、あるいは単に群衆の圧力に抵抗する道徳的強さが欠けているという理由で、個人を犠牲にします。そのような事例の一つが、ペスト流行中のミラノの理髪師ジャン・ジャコモ・モラの拷問と処刑です。この裁判は、証拠よりも民衆のヒステリーとスケープゴートの必要性によって動かされたものであり、アレッシンドロ・マンゾーニが『悪名高きコロナの物語』で描写しています。マンゾーニが記すように、当局は理性によってではなく、

> 世間の期待に確えられないことへの恐怖（それは 率ではあったが、 かにそうだった）、無実の人々を発見した場合に賢くない印象を与えることへの恐怖そして群衆の叫びを自らに向けることへの恐怖によって動かされていた。

これは、群衆からの非制度的な圧力がいかに強力になり得るかを如実に示しています。もう一つの例は、恐怖、無知、そして世論の圧力が言語に絶する残虐行為へと繋がった魔女裁判の長い歴史です。これらの事例において、「民意」は賢明でも正義でもありませんでした。民意の宥和は、真実、尊厳、そして罪のない人々の命を犠牲にして行われたのです。さらに、多数派の意思を倫理的正当性の十分な基準として擁護しようとする者は、次のような論理的帰結を受け入れざるを得ません。すなわち、最終的解決は、数百万人の支持を得て民主的な選挙によって権力を握った政権によって画策されたものであるため、受け入れられるようになる、という帰結です。繰り返しますが、これはポルノ禁止がジェノサイドに匹敵すると言っているのではなく、多数決を十分な道徳的基準と見なすことの誤りを示しているに過ぎません。民主主義とは単なる多数決ではありません。それは、多数派の恣意的な権力を含む、恣意的な権力から個人を守るために設計された手続きの枠組みなのです。倫理的・法的制限がなければ、それは民主主義の正当性を装った一種の専制政治、民衆の顔をした一種の全体主義的権力となる。中には反論する人もいるかもしれない。民主主義において何が正当かを決めるのは多数派でないなら、誰が決めるのか？ この問いは民主主義のパラドックスの核心を突いている。その答えは、非常に単純であると同時に、非常に複雑でもある。

i) 一方で、権力は確かに多数派に属するという明白な事実があるが、この権力は絶対的なものではなく、制限によって制約されている。そして、これは反民主主義的な立場ではない。社会におけるあらゆる形態の権力、たとえ最も正当な権力（政府、裁判官、警察、親など）であっても、そこには根本的な制限（いわば教義）がなければならないという点に、理性的な読者なら誰でも同意するだろうと私は確信している。

ii) 一方、こうした限界を定義し、規制するという実際的な課題は、政治哲学における最も困難で永続的なジレンマの一つであり、偉大な思想家たちでさえも挑問を題いられてきた である。

アレクシ・ド・トクヴィルは次のように書いている。

> 政治的に言えば、人民は何でもする権利を持つという格言は、不敬虔で忌まわしいものだとは私は考えている。しかし、あらゆる権威は多数派の意志に由来すると主張してきた。では、私は自ら矛盾しているのだろうか？

それから2世紀近くが経った今でも、私たちはこの百万ドルの がある いに 対する明確な答えをまだ見つけていない。どうすれば民主主義を多数派の意志の表明としつつ、同時にその脆弱性から免れることができるのだろうか？ アン・アップルバウムは次のように警告している。

> 適切な条件が整えば、どんな社会でも民主主義に反旗を翻す可能性がある。実際、歴史を例に挙げれば、いずれすべての社会がそうするだろう。

この観察は悲観主義ではなく、現実主義である。民主主義はクーデター、外部からの不安定化、あるいは軍事侵略によってのみ崩壊するのではない。時には、自らを守ると主張する人々自身によって、ゆっくりと弱体化させられることもある。教訓は明白である。民主主義は、単なる多数派の好みの実施以上のものでなければならない。自由を守るシステムでなければならないのだ。

もちろん、私はここでこのような深遠な哲学的問いを解こうとは思わない。ただ、民主主義が単に多数派の好みを強制するのではなく、個人の自由を守るシステムであると理解されるならば、ポルノの禁止には厳格な正当化が必要であることを指摘しておこう。ジョン・スチュアート・ミルは次のように警告した。

> 人々は自らの一部を抑圧したいと望むかもしれない。そして、これに対する予防措置は、他のあらゆる権力の乱用に対するのと同じくらい必要である。

この言葉は、私たちの主張の本質を完璧に捉えている。

性的に露骨な素材は、現代の発明などではなく、太古の果てにまで遡り、時代を超えて様々な形をとりながらも、音楽、数学、ユーモアといった他の文化的表現形態と同様に、常に普遍的な人間の欲望の普遍的な側面を反映しています。特にユーモアは、この文脈において特に重要です。ポルノグラフィと同様に、コメディは支配体制を揺るがす人間の自由の一側面を明らかにします。コメディはしばしば権力の不条理を暴き、タブーや教義に挑戦してきました。そのため、どちらもしばしば検閲され、烙印を押され、沈黙させられてきました。セクシュアリティと笑いには共通の秘密があります。どちらも快樂によって恐怖を解消するのです。そしてまさにだからこそ、恐怖で支配する者たちは、常にそれらを沈黙させようとしてきたのです。しかし、それらが生き残るのは、人間の精神に宿る、いかなる法令や教義も消し去ることのできない、根源的で抑えきれない何かに声を与えるからです。もちろん、すべてのポルノグラフィが芸術を目指しているわけではありませんが、すべての音楽、すべてのコメディ、すべての文学もそうではありません。重要なのは、たとえ商業化されたものであっても、個人的な表現は、他の合意に基づく自己表現と同様に、最低限の尊重を受けるに値するということです。他のあらゆる人間的表現と同様に、ポルノもユーモアも存在するために正当化を必要としません。むしろ、それらを禁止することこそが、裏付けのある論理的根拠を必要とするのです。ジョン・スチュアート・ミルは次のように述べています。

文明社会の一員に対して、本人の意志に反して権力を行使できる唯一の目的は他者への危害を防ぐことです。本人自身の肉体的あるいは精神的な利益は、十分な根拠とはなりません。

そして、これは単なる理論的な懸念ではなく、真に自由主義的な民主主義の基盤となる根本的な柱の一つです。この原則を受け入れるならば、立証責任は個人の自由を擁護する者ではなく、禁止を課そうとする者にのみ課せられること

になります。言い換えれば、自由社会の基本原則は、個人の自由は正当化される必要がないということです。しかしながら、個人の選択と他者に影響を与える選択との境界は必ずしも明確ではないことに留意する必要があります。実際この区遠は政治哲学において最も深課かつ永題的な一つの提起する。

したがって、民主主義の枠組みにおける重要な問いは、「なぜポルノは許容されるべきか？」ではなく、むしろ、正しく問われてきたように、「ポルノを禁止する正当な根拠はあるのか？」である。簡潔に答えると、自由社会においては、同意するすべての成人が、自らの性質と欲望に従ってセクシュアリティを自由に表現できるべきである、ということだ。ポルノの視聴や制作は、まさにこの原則に合致する。スポーツを観戦したりプレーしたりすることを強制されないのと同様に、ポルノの視聴や参加を強制される者はいない。しかし、道徳的な理由でポルノを禁止することは、普遍的ではなく、主観的な視点に過ぎないセクシュアリティ観をすべての人に押し付けることを意味する。もちろん、スポーツとの類似性は必ずしも適切とは言えません。なぜなら、ポルノは、それにアクセスしたくない人（無関心な成人）やアクセスしてはいけない人（未成年者）だけでなく、それを楽しむ人（ただし、特定の瞬間や状況においてのみ）にも影響を与える可能性があるからです。ポルノを好む人でさえ、自分が積極的に求めている時以外では、望まない露出を望まないでしょう。伝道の書に賢明に述べられているように、「何事にも時がある」のです。しかし、これはポルノそのものに対する反論ではなく、むしろ規制とアクセスの問題です。ポルノは特に慎重に立法化されるべきであることは明らかです。

さて、主要な反論を検討し、批判的に分析してみましょう。これまで見てきたように、これがこの問いに答える唯一の意味のある方法だからです。

1) ポルノは危険か？

よくある批判は、ポルノはそれを制作する人にとっても、それを消費する人にとっても危険であるというものです。

1.1) それを制作する人にとって危険か？

はっきりさせておきたいのは、アダルトエンターテインメント業界の広大さを考えると、深刻な問題が存在しないと考えるのは非現実的だということです。心理的圧力、感情操作、非倫理的な労働条件など、これらの問題の中には紛れもなく犯罪行為に当たるものもあります。そのため、パフォーマーには常に断る選択肢があったと主張することで、こうした虐待の潜在的な重大性を軽視することは、表面的なだけでなく危険です。こうした問題に関する真剣な議論は、このような過度な単純化に頼るべきではありません。これは私が抱いている見解ではなく、ここで擁護するつもりもありません。虐待は道徳的な非難を受けるだけでなく、断固とした法的訴追を受けるべきです。商業的な文脈における力学は、私的な性的関係における力学とは異なります。環境が不健全な場合、パフォーマーは、単に報酬を得て、組織化され、期待に満ちた環境にいるという理

由だけで、「これはだめ」「今日はだめ」と言わないようにプレッシャーを感じるかもしれません。どちらの状況も、倫理的に重大な懸念を引き起こします

1つ目は、あまりにも明白な理由で問題となります。同意は、一般的な同意ではなく、具体的な同意でなければなりません。しかし、2つ目の「今日はだめだ」と言えない気持ちも同様に重要です。最も性的に活力があり自信に満ちた人でさえ、欲望が薄れる瞬間、時には長期間を経験することは当然です。そして、これも尊重されるべきです。欲望には季節があり、自由とは、欲望が激しく燃え上がる瞬間だけでなく、それが薄れ、静かに退いていく瞬間も尊重することです。欲望を感じない権利は欠陥ではありません。それは私たちの人間性の一側面であり、制作のリズムや他人の期待によって消し去られてはならないものです。そのため、状況は通常のセックスよりもデリケートであり、商業的な文脈ではそのようなリスクにさらされやすいのは事実です。しかし、悲劇的に、同じ力学が不健全な私的な文脈で、しかも、行為の公的な性質によって非倫理的な行動さえも制限されるプロのポルノよりもはるかに深刻に起こり得ることを、認識しておくことも重要です。他の潜在的に危険な職場環境と同様に、真の安全は健全な法律、プロセスを管理する人々の知性、共感、倫理観、そしてよく書かれた契約にかかっています。

性的な表現は、あらゆる形態の人間の親密さと同様に、常に自由であり、決して義務ではありません。いかなる状況においても、誰も自分の身体を差し出す道徳的な義務を感じるべきではありません。欲望を義務に変えることは、その魂を消滅させることです。もちろん、欲望がなくても自分自身を差し出すことを選択することは、愛情や寛大さの行為となり得ます（ただし、人間的に疑問視される点もあります。もし両方のパートナーが相手を喜ばせるためだけに愛し合ったらどうなるのでしょうか？皮肉にも逆説的にも、その結果は誰も喜ばないということです）。しかし、それは常に選択であり、決して期待であってはなりません。快楽に対する精神的な開放性は、それが本物で自由な場合、確かに親密さを豊かにしますが、決して義務と混同してはなりません。恥じることなく取り消せる職業上の義務と、拒否を罪悪感に変えてしまう道徳的な期待との間には、根本的な倫理的な違いがあります。家父長制的な結婚生活においては「ノー」と言うことは往々にして「利己的」とみなされます。もちろん、これは両者を同一視するものではありません。しかし、正直に言えば、感情的な強制と道徳的期待は、規制された職業上の状況よりも、私的な関係においてより陰險に作用する可能性があることを認めなければなりません。その違いは、行為を拒否することによる道徳的な帰結にあります。健全な職業上の状況においては、行為者はいつでも道徳的に欠陥があるとは見なされることなく、辞退することができます。経済的な影響は生じるかもしれませんが、誰も彼女の尊厳を疑うことはありません。彼女の「ノー」は彼女の価値を汚すものではありません。また、彼女の空想が自由に表現されたとしても、それが彼女を恥辱の印とすべきではありません。自分の身体を差し控える自由と、自分の欲望を露わにする自由は、同じ尊厳の表裏一体です。義務と期待によって形作られた有害な結婚生活においては、同じ「ノー」が罪悪感、感情的なプレッシャー、あるいは静かな失望に直面する可能性があります。その代償は金銭的なものではなく関係性におけるものです。愛情、尊敬、あるいは平和が奪われるかもしれませ

ん。人は奉仕する存在ではない。自由は、利用可能であることが前提とされるところで終わり、自由が終わるところで尊厳も終わる。

確かに、重大犯罪が存在するだけで、全面禁止を正当化するのに十分だと主張する人もいるかもしれませんが。彼らは、明白な事実（これほどの規模の世界的現象が深刻な問題に無関係でいるとは考えにくい）を認めるほど正直で明晰な人は、最も過激な禁止論者の側に立つか、あるいはとてつもない無神経さで非難されるかのどちらかしかないと主張するかもしれませんが。しかし、このような考え方は、あらゆる複雑な現実を二元論に還元してしまいます。後ほど論じますが、決して忘れてはならない真実が少なくとも2つあります。

i) 第一に、残念ながら、極めて深刻な犯罪はあらゆる人間社会、たとえ最も高貴とみなされる人々の中にさえ存在するということです。正式な同意と真の、制約のない自由との間の緊張関係は、ポルノグラフィに特有の問題ではありません。結婚を含め、感情的なプレッシャー、社会的な期待、あるいは経済的な依存が人の選択に深く影響を与える可能性のある多くの領域で生じ得ます。しかし、私たちは結婚が病的な事例を抱えているからといって結婚を禁止するわけではありません。私たちは結婚の重要性を認識し、結婚の中で脆弱な立場にある人々を守るために尽力しています。ここでも同じ論理が当てはまる。

ii) 第二に、深刻な問題が生じる可能性があるからといって、多くの人々にとって表現や美の形態だけでなく、信仰が信者にとってそうであるように、人生における深く個人的かつ重要な側面を象徴するものを禁止することを正当化することはできない。どちらの場合も、私たちは外部から判断できない親密な意味の領域を扱っている。信仰が正当であるために集団規範に従うことを要求しないのと同様に、性的な表現にもそれを要求すべきではない。

禁止は、上記の問題を解決するどころか、同様に深刻な別の問題を生み出す。それは、露出が深い実存的欲求である人々の自由を否定することから始まる。問題を含む文脈全体を破壊することで問題を排除することは、患者を殺して癌を「治す」ことを試みることに、あるいは非倫理的な行為を助長するリスクを排除するために食事、衣服、電話の使用を拒否することと同じである。そうではなく、私たちは善良で自由に存在に値するものを維持しながら、悪を取り除く可能性を信じなければならない。まさにこのような場合こそ、識別力が不可欠となります。

犯罪は断固として非難され、訴追されるべきですが、だからといってポルノの禁止が正当化されるわけではありません。歴史が示すように、全面的な禁止は需要を根絶するものではありません。需要は地下に潜り、乱用の発見、防止、処罰がより困難な市場に追いやられるのです。ポルノが例外になると考える理由は見当たりません。もちろん、これは規制が常に正しい答えであるという意味ではありません。人身売買、児童搾取、ハードドラッグなど、一部の市場はそれらがもたらす害が本質的であり、監視によって排除または軽減できないため、禁止されるべきです。しかし、ポルノはそうではありません。本質的に有害な市場とは異なり、ポルノは適切な規制、公正な労働条件、インフォームド・コンセント、そして義務的な健康診断の確保によって安全に運営することがで

きます。合法性は完璧さを保証するものではありませんが、透明性と監視を可能にします。公然と運営されるセクターは進化し、改善し、倫理基準を遵守することができます。近年、これらの問題への関心は著しく高まっています。それでもなお不十分だと判断されるならば、活動家たちは禁止運動に加わるのではなく、参加を選択した人々の自由を否定することなく、より厳格な倫理基準の確立を推進する方がはるかに効果的でしょう。

犯罪に対する懸念は理解でき、正当なものです。しかし、この理由でポルノを禁止すべきだと主張するのは、教会内に虐待的な人物がいるという理由で教会を張止すべきだと主張するのと同じくらい不合理です（そして、これらの犯罪は、誰もが知っているにもかかわらず、私が名前を挙げることさえしたくない理由で、プロのポルノグラフィーで起こりうるあらゆる犯罪よりもはるかに深刻であることに留意すべきです）。明らかに、これは不合理で不当な対応です。多くの人々にとって深い価値を持つものを、強い倫理的監視を要求しながらも保存することは、被害者の痛みを裏切ることではなく、否定でもなく識別力、つまり、非難されるべきものと、依然として存在する価値のあるものを区別する能力です。同じことは、人間社会で最も神聖な制度であり、愛とケアの揺りかごであると言える家族にも当てはまります。しかし、家族が有害な状態になると、最も壊滅的な精神的および身体的虐待の舞台にもなり得ます。だからこそ、私たちは家族を廃止すべきでしょうか？ もちろんそうではありません。なぜなら、何百万もの命にとって、家族の価値は計り知れないものであり、痛みへの答えは破壊ではなく正義であることを理解しているからです。私たちは、意味のある美しいものを、それを裏切った者を罰するために破壊することはありません。私たちは、依然として存在する価値のあるものを癒し、守り、保存しようと努めます。

改革ではなく廃止、理解ではなく単純化という論理に従えば、仕事、スポーツ、音楽、教育、観光、ゲーム、ボランティア活動、そして事実上あらゆる人間の活動や制度を禁止せざるを得なくなるでしょう。なぜなら、犯罪はどんな状況でも起こり得るからです。人類の最も崇高な活動の一つである慈善活動でさえ深刻なスキャンダルに巻き込まれてきました。ハイチで起きたオックスファムのスキャンダルを考えてみてください。人道支援活動家の一部が権力を乱用し弱い立場にある女性を搾取したのです。このような理由で慈善活動を禁止すべきでしょうか？ もちろん、そうではありません。問題は慈善活動そのものではなく、その中で弱い立場にある個人を食い物にする個人なのです。

ポルノにも同じ論理が当てはまります。業界における明確な規制の必要性は禁止の理由ではなく、他の分野と同様に、関係者の保護を確実にするための手段なのです。さらに、この現象の規模から見て、虐待が全く起こらないと信じるのは不合理であるように、この業界では従来の職場よりも不正行為がより蔓延していると考えられる理由もあります。従来の職場では、様々な形態の虐待が、しばしば密室で、世間の監視の及ばない場所で発生し、その環境がまともで議論の余地がないとみなされているがゆえに、隠蔽された形で行われています。

今この瞬間にも、何千人もの人々が適切な安全対策を講じないまま建設現場で働いており、これが毎年何千人もの命を奪っています。しかし、私たちは建設業の禁止を求めません。なぜなら、その社会的価値と、規制によって安全性を向上させる可能性の両方を認識しているからです。リスクが比較できないポルノが、なぜより危険なものとして扱われるべきなのでしょう？

法律に明記されていない損害もあります。すべての傷が犯罪ではありませんがそれでも傷であることに変わりはありません。ですから、それらは重要なのです。ポルノの中に有害な環境はあるのでしょうか？ 必然的に、どこかに答えは必ず「イエス」です。これほどの規模の人間社会で、このような問題から完全に逃れることは不可能です。しかし、だからといって性表現全体を非難する理由にはなりません。ポルノグラフィーを欲望を探究するためではなく、むしろ萎縮させるために利用する人がいるという危険性はあるのでしょうか。もちろんあります。世の中には、理解できないものを傷つける人が溢れています。十分に注意してください。これは、シーンがどれほど露骨か、ファンタジーがどれほど強烈かという問題ではありません。女性が自分の深い欲望を自由に表現することを選ぶとき、たとえそれが最も大胆で奔放なものであっても、重要なのは、それが彼女のものであり、強制されたものではないということです。そして、その自由にはすべてが含まれます。大胆に自分のセクシュアリティを受け入れる権利も、完全に拒否する権利も。どちらの選択も（そしてその中間のすべても）正当です。彼女の自由、自分のセクシュアリティをどのように生きるか、どのように生きるかを選択する彼女の自己決定、彼女の幸福、これらが違いを生むのです。（そしてこの真実はポルノをはるかに超えています。）結局のところ、結婚を有害なもの（厳密には犯罪ではありませんが）に変えてしまう人がいるからといって、結婚を違法としないのと同じように、ポルノを悪用したり、単なる金儲けの道具に貶めたり、人の心の奥底を尊重できるものを空虚で魂のない、意味を剥奪し、本来明らかにすべき美しさが見えないようにしてしまう人がいるからといって、ポルノを違法とすべきではありません。

一方で、統計的に見て、人間の大きな みににおいて避けられない重大な不正行為の存在は、肯定的で深い意味を持つ経験の現実を否定するものではありません。業界の多くの人々は、金銭的な関心がほとんどないか全くない場合でも、業界を去った後でさえ、個人的な充実感について率直に語っています。そしてF1ドライバーと同様に、彼らが引退するのは後悔からではなく、単に家族の事情やその他の個人的な理由から、人生の新たな章を始める時が来たと感じたからかもしれません。こうした肯定的な証言は、無視できない現実です。これをポルノに対するナイーブな、あるいは「ロマンチック」な見方だと一蹴する人もいるかもしれない。しかし、真にナイーブなのは、人間の欲望、動機、そして願望を、単一の、単純な物語に還元できるという思い込みである。ポルノ体験について肯定的に語る女性は、金銭的利益のためだけにそうしているという考えは、反証不可能な主張である。カール・ポパーが説明したように、経験的に検証できない理論は科学的に妥当ではない。もしすべての肯定的な証言が金銭的利益に影響されているとして自動的に却下されるならば、この理論を反証できる観察は存在しない。これは、すべての発言を無批判に受け入れるべきとい

う意味ではないが、原則として、すべての肯定的な証言を演繹的に却下することは、合理的な立場ではなく、独断的な立場をとることに等しい。そして、理解の真の敵は理性ではなく、独断である。

リスクの問題に戻ると、モーターレース、極限登山、火山や洞窟といった危険な環境での科学的探査など、社会的に容認されている多くの活動が、ポルノよりもはるかに大きな危険を伴うことを指摘しておく価値があります。これらの活動は危険を伴いますが、社会はそれらの廃止を求めています。なぜなら、その危険は自発的で、情報に基づいたものだからです。誰もがそれぞれ異なる方法で人生に意味を見出します。ある人にとって無謀または不条理に思えるものでも、他の人にとっては人生を精一杯生きることなのです。したがって、ポルノへの反対は、明白な害悪よりも、性表現に対する文化的な不快感に根ざしていることが多いようです。自由な社会において、一部の人が危険または賢明ではないと考えるという理由だけで、合意に基づく成人の行為を禁止する正当な理由はありません。真に関心を持つ人は、制限を課すのではなく、議論を展開すべきです。

1.2) 視聴する人にとって危険?

ポルノは精神衛生に影響を与える可能性があるという主張がよくあります。ポルノグラフィは、特に精神的に脆弱な個人に悪影響を及ぼす可能性があります。社会でよく見られる、極めて攻撃的で、無礼で、欲求不満に満ちた行動は、少なくとも部分的には性的抑圧に起因しているのではないかと、私はしばしば考えます。私は心理学の専門家ではありませんが、満たされない性的欲求が長期間続くと、感情の不均衡につながるかどうかは、哲学的にも正当な問いです。これは決定的な結論を主張するものではなく、哲学的な非対称性を浮き彫りにしたいのです。私たちはポルノグラフィの潜在的な害を精査する一方で、特定の状況、特に羞恥心や内面化された罪悪感によって引き起こされる場合における、ポルノグラフィの欠如がもたらす潜在的な心理的影響についてはほとんど考慮されていません。

しかしながら、ポルノグラフィに関する警鐘を鳴らすような主張とは異なり私の見解は仮説であり、確実なものではないことを認めます。また、私の意図は禁欲そのものを批判することではないことも強調しておきます。禁欲は正当かつ個人的な選択であり、多くの人にとって全く悪影響を及ぼさない可能性もあります。私が言いたいのは、交際関係になく、売春を拒否し、カジュアルなセックスが望ましくもアクセスしやすい選択肢でもない人にとって、現実的な選択肢は限られているということです。そのような場合、選択肢は、ポルノを含む何らかの自己刺激か、禁欲のどちらかになります。これは、ポルノが親密さへの欲求を満たすという意味ではありません。そうではありません。しかし特定の状況下では、ポルノは圧力弁として機能する可能性があります。つまり蓄積された緊張を発散させ、機能的な内面のバランスを維持し、抑圧が苦痛につながる可能性のある心理的緊張を回避する手段となるのです。これは理想ではなく、単に人間の現実です。潜在的な害について議論するのであれば、禁欲

は本質的に中立的で、ポルノは本質的に有害であると 定めるのではなく、それらを公平に比較検討すべきです。そして、ポルノに起因するリスクが、長期または強制的な禁欲に伴うリスクを本当に上回っているかどうかを問う価値があります。

特に、性に対する歪んだ認識の問題に関して言えば、一部の人々、特に批判的思考力に乏しい人々にとって、ポルノが非現実的な期待を抱かせるといった悪影響を及ぼす可能性があることを否定しません。しかし、これはポルノに限ったことではありません。ソーシャルメディアにおける完璧主義や、主流の映画やドラマにおける理想化された描写を考えてみてください。確かなことは、ソーシャルメディアには中毒性があり、現実に対する歪んだ見方を助長するということです。ケムトレイル、反ワクチン運動、地球平面説、進化論の否定といった陰謀論の蔓延を考えてみてください。

ソーシャルメディアの規制強化を訴える運動は確かに存在しますが、全面的な禁止を提唱する動きはほとんどありません。むしろ、意識向上、責任感の醸成そして適切な利用の確保に重点が置かれています。当然のことながら、アルコールやその他の成人向けコンテンツと同様に、ポルノは成熟した個人のみがアクセスできるべきものです。未成年者がアクセスできないようにすることは別の問題であり、全員を禁止するのではなく規制に関する問題です。

ポルノグラフィーを強迫的に摂取する人はいるのでしょうか？ 確かにそうです。科学が示すように、テレビやビデオゲーム、さらには勉強、栄養、運動といった健康的な活動など、他の娯楽でも強迫的に摂取する可能性があるのです。科学は理解を深めるためのものであり、道徳的な運動を正当化するためのものではありません。強迫的な行動に苦しむ人は、薬やセラピーを通して助けを求めるべきです。彼らはケア、サポート、そして尊重を受けるに値するのです。彼らの苦しみを理由に他者を罰するような、非難に満ちた国家であってはなりません。そのような国家は、彼らにとっても他者にとっても、正義にも尊厳にも欠けるでしょう。私はごくたまにビールを飲み、妻は毎週金曜日に2ユーロで宝くじを買っています。アルコール依存症やギャンブル依存症に苦しむ人がいるからといって、これらを禁止すべきなののでしょうか？ なぜ私たちは、本質的に無害な「悪徳」を平和に楽しむ自由があってはいけないのでしょうか？ 問題はポルノグラフィー、ソーシャルメディア、ギャンブル、スマートフォンの使用、買い物、アルコールそのものではなく、それらに関わる文脈なのです。

WHOの権威を持ち出して、巧妙に反論する人もいるかもしれないが、これは誤解である。世界保健機関（WHO）はポルノ禁止を主張しているわけではない。WHOの懸念は、脆弱な集団（特に未成年者。未成年者へのアクセスは厳しく制限されるべきである）を保護することに集中しており、成人の性的表現を禁止することではない。WHOは、スマートフォンのように、リスクはあるものの依然として非常に価値のあるツールの禁止を求めずに、過度のスクリーンタイムについて懸念を表明しているのと同じである。

結論として、ポルノが悪影響を及ぼす可能性があることは否定できないもののそれを社会の疫病のように描写することは、現実を歪曲する甚だしい誇張である。ほとんどの人にとって、通常状況では、ポルノは無害な娯楽として機能している。これは、ポルノが誰にとっても無害であるという意味ではなく、他の種類の成人向け娯楽と同様に、大多数の人々が悪影響なしに責任を持って楽しむことができるという意味である。道徳的パニックを煽るのではなく、他の成人向け産業と同様に、責任ある消 費者に焦点を当てる方が、より合理的なアプローチと言えるでしょう。

2) ポルノの廃止は、個人的な性的コンテンツの違法な流通を防止できるでしょうか？

ポルノを禁止する理由の一つとして、ポルノが私的な性的コンテンツの無許可の流通を助長しているという点が挙げられます。これは非常に深刻な問題であり、私たちの関心を引くだけでなく、被害者への共感と揺るぎない連帯を示す必要があります。恥は、彼らの信頼を裏切ったり、信頼を糧にしたりした者たちのものであり、彼ら自身のものではありません。彼らは孤独ではありません。彼らと共に立ち上がる人々がいます。私は彼らにこう伝えたいのです。「もし今日が耐え難い日だと感じるなら、頑張ってください。あなたはこの痛み以上の存在です。あなたは愛、尊敬、そして正義を受けるに値します。あなたは、自分がされたことで定義されるものではありません。」しかし、合法的なポルノを禁止することで（つまり、性的表現や露出に満足感を覚える人々の自由を制限することで）この問題を解決できるという考えは、複数の理由から誤りです（男性も被害者になり得ますが、烙印や結果は女性の方がより深刻になることが多いため、説明を分かりやすくするために、以下では女性のケースについて述べます）。

抑圧的で、したがってポルノに反対する国家（ファシスト、共産主義、神権政治など）において、女性が自分の親密なビデオが合意なく共有されていることを通報したと想像してみましょう。彼女は保護されるのでしょうか、それとも「不道徳な行為」として迫害されるリスクがあるのでしょうか？規制のある国では、ビデオの違法配信を通報し、処罰するための法的手段があります。しかし、禁止主義の国では、性的コンテンツについて議論すること自体が烙印を押されたり、犯罪化されたりする可能性があるため、被害者が正義を求める上で障壁に直面する可能性があります。そのため、被害者は虐待の通報を躊躇する可能性があります。

ポルノが禁止されている国では、理論上、同意なしに共有されるような親密なビデオは存在しないため、この問題はそれほど深刻ではないと主張する人もいるかもしれませんが、しかし、この主張には少なくとも2つの理由から大きな欠陥があります。

第一に、ポルノが合法で広く入手可能な国であっても、同意のない親密なコンテンツの配布または入手は非常に重大な犯罪であり、被害者の保護と犯罪者の

刑法に基づく訴追を目的とした特定の法律によって起訴されます。こうした保護を強化し、その確実な執行を確実にすることは、揺るぎない支持に値する崇高な目的です。

二つ目は、たとえ不合理なことに、禁欲主義の国では親密なビデオが拡散しにくいと仮定したとしても、何も変わらないということです。流通量を減らしても、その代償が被害者の沈黙を招いたり、彼女のセクシュアリティを犯罪化したりすることであれば、何の意味もありません。さらに、違法拡散による最も深刻な被害は、必ずしも大規模に発生するわけではなく、知人の間で発生し、深く不当な苦しみをもたらすこともあります。これは、入手可能なポルノの量とは無関係です。この痛みは、セクシュアリティが強く烙印を押されている状況では、さらに壊滅的になり得ます。まさにセックスがタブーで、ポルノが禁止されている国では、被害者が報復を受けるリスクはさらに高くなります。なぜなら、被害者は自分の意志に反して露出させられるだけでなく、社会的に容認されない行為の罪人として烙印を押されるからです。このような状況では、被害者は自衛する術がなく、ビデオを拡散した者は処罰を受けず、あるいは男性よりも女性を非難する社会の偽善に支持を見出すことさえあります。

3) ポルノは品位を落とすのか？

この批判は、何が「品位を落とす」のか、そして誰にとってなのかという、非常に疑わしい前提に基づいています。ここですべての価値観を相対化しようとしているわけではありません。むしろ、根本的な倫理的論点を強調したいのです。それは、成人が性的な表現に対して有効な情報に基づく同意を与え、それに恥や害悪を感じていない場合、それを「品位を落とす」と呼ぶことは、行為そのものを反映しているのか、それとも外部の道徳的判断を投影したものなのか、自問自答しなければならないということです。

かつては、フローベールの『ボヴァリー夫人』でさえわいせつ罪で起訴されました。また、システィーナ礼拝堂のミケランジェロのフレスコ画でさえ、長い間その裸体ゆえにスキャンダラスとみなされていました。何が「品位を落とす」とみなされるかは、客観的な真実というよりも、文化的な認識の問題であることが多いのです。演劇もまた、今日では想像もできないほど、長きにわたり評判の悪いものとみなされてきました。仕事についても同じことが言えます。現代の私たちが崇高で尊厳のある営みとみなすものが、かつては恥ずべきものと見なされていたのです。アレッサンドロ・マンゾーニは『婚約者』第4章で、老齢を迎えた商人が「この世で何かに時間を費やしてきたこと」を恥じ、いつもの知性と繊細なユーモアで「売ることは買うことと同じくらい馬鹿げている」と述べ、社会にとって不可欠な活動を貶める行為と見なすことがいかに不合理であったかを浮き彫りにしています。

3.1) 誰にとって貶めるのか？

成人が自発的に行う行為を「貶める」とレッテルを貼るのは、客観的な現実ではなく、単に個人的な感情の外面的な投影に過ぎません。私は認めますが、個人的には多くのリアリティ番組が、出演者の尊厳と知性の両面において貶めるものだと感じています。しかし、これは好みの問題であり、法的問題ではないことは承知しています。楽しんでいる人もいるし、それで十分です。確かに、そのような番組を法律で禁止することは、個人の自由の明白な侵害となることは、誰もが認めるところでしょう。

もしポルノが視聴者にとって品位を落とすものだという主張があるなら、スポーツや映画、ドキュメンタリーを見ることよりも、セックスを見るのがより品位を落とすと言えるのはなぜでしょうか？

ポルノ制作は屈辱的だと主張する人もいるかもしれませんが。しかし、もしある人が何かを肯定的で充実した経験として捉えているのであれば、それが伝統的な社会規範に当てはまらないという理由だけで批判する理由はありません。ポルノには猥褻な言葉や、合意に基づく快樂的な支配と服従の探求といった要素が含まれることがあります。しかし、これらは相互の同意と個人の自律性によって定義される空間内で行われるものであり、強制とは根本的に異なります。レイプ犯の病的な精神を刺激するような抑圧とは全く無関係です。根本的な違いは同意です。性的ダイナミクスを魅力的なものにしているのは、まさにそれが双方の自由に選択され、享受されているという事実であり、いかなる種類の虐待とも全く異なります。また、暴力や苦しみではなく、信頼、心理的な服従そして支配と脆弱性の役割を探求する喜びを共有することにある、合意に基づく支配と服従のダイナミクスに深い充足感を見出す人がいることも注目に見えます。これも、自由に選択され、相互に享受される限り、有効かつ意味のある性的表現の形態です。倫理的に健全であるためには、これらの力学は深い感情的調和に根ざし、関わる人々の内なる真実と共鳴するからこそ選ばれなければなりません。このような経験を「屈辱的」とレッテルを貼ることは、人間のセクシュアリティの多様性を無視し、個人的な不快感を他者に投影するリスクを負います。その多様性には、大胆な表現だけでなく、沈黙も含まれます。性に傾倒することで自律性を表現する人もいれば、性から遠ざかることで自律性を表現する人もいます。ある自由の形態が他の自由より正当である、ということはありません。禁欲は抑圧ではなく、無関心は失敗ではありません。「イエス」と言う自由は、一瞬だけでなく、もしかしたら人生全体に対して「ノー」と言う同等の自由がなければ、何の意味も持ちません。さらに、ポルノは必ずしも大胆な力学を包含するわけではありません。最も柔らかくロマンチックなエロティシズムから、より露骨なパフォーマンスまで、幅広い表現を網羅しています。ポルノには単一の定義はなく、セクシュアリティを体験する方法も単一ではありません。重要なのは、あらゆる形態が同意と個人の選択に基づいているということです。

もし性体験が成人同士が意識的に選択し、安全に享受されるのであれば、それが品位を落とすとみなされるかどうかは個人の見解の問題であり、禁止を正当化する理由にはなりません。「私が好きではないからといって、あなたもその

ように楽しむべきではない」と誰かが命令するのは馬鹿げています。結局のところ、この原則は他のあらゆる人間の活動にも当てはまります。そして、極限登山との比較もまた非常に興味深いと思います。ある人にとっては、非常に満足感を与える一方で、ある人にとっては悪夢となるでしょう。前者からこの経験を奪うことは、後者にそれを強いることと同じくらい重大な犯罪となるでしょう。

また、ポルノに懐疑的であったり、個人的に無関心であったりする人でさえ、ポルノのすべてが醜悪で、魂を失っていて、品位を落とすものではないことを認めるだろうと考えるのは、不合理ではないということも考慮に値します。既存のコンテンツのほぼすべてを除外したとしても、多くの人が幅広く多様な作品に触れれば、少なくとも心に響く作品をいくつか見つけられないとは考えにくい。彼らが「偽善者」だからではなく、エロティックな想像力が音楽や詩と同じくらい多様で複雑だからだ。たとえ「嫌いだから禁止する」という（倫理的に成り立たない）禁止主義的な論理を、不条理にも受け入れたとしても、全面禁止の背後にある暗黙の三段論法は依然として崩壊するだろう。

3.2) 道徳的二重基準

実際には、ポルノが品位を落とすという考えは、女性のセクシュアリティは常に制御され制限されるべきものとされてきた長い文化的伝統を反映していることが多い。ポルノに出演する女性がしばしば低く評価されるのに対し、男性がそれほど、あるいは賞賛さえされないのは偶然ではない。これは、多くのパートナーを持つ男性を称賛し、同じ行動をとる女性を非難するのと同じパターンである。しかし、問題が社会的スティグマにあるならば、解決策はポルノを禁止することではなく、それを取り巻くメンタリティを変えることです。女性を貶めているのはポルノではなく、むしろ女性の性的選択に道徳的負担を課す社会規範です。こうした非難は性的抑圧の一形態です。このような非難は不当であるだけでなく、真のキリスト教倫理が推進する公平性と非裁きの原則と根本的に相容れません。

しかし、女性がポルノグラフィーに「出演すべきではない」という主張の背後には、さらに厄介な問題がある。それは、女性がやりたくないからではなく、他人が彼女にふさわしくないと言うからだ。こうした理屈は女性を守るものではなく、性差別的であり、究極的には非人間的である。それは、女性が自らの尊厳を尊重すべきことと、それを辱めるべきことを自分で完全に決定する能力を持っていないという前提に基づいている。女性に、自分の道徳観に反するからという理由で「ポルノグラフィーを作ってはいけない」と言うことは、「人前で話してはいけない」とか「家にいて料理をしなさい」と言うのと何ら変わらない。

これは女性の魂を守るのではなく、彼女の意志を監視することである。誰かが自らの尊厳を定義する権利を否定することは、いかなる合意に基づく行為よりも根深い形の客体化なのである。そこにはこう書いてあります。「あなたはあなたでいることを許されない。なぜなら、私たちはすでにあなたがどうある

べきかを決めているからだ」。そして、誰かを守ろうと装いながら、その人らしくある権利を否定することほど残酷で傲慢な侮辱はありません。私は女性を代弁するつもりはありません。ただ、裁かれた人々の側に立ち、彼女たちの尊厳を肯定したいだけです。

スティグマは、ポルノグラフィーを職業として選んだ人だけを狙っているのではないことを忘れてはなりません。好奇心、欲望、自由への欲求、あるいは単に手軽にお金を稼ぐためだけに、一度ポルノグラフィーに触れたことがある人にも、おそらくもっと残酷な形で襲い掛かります。そして時が経つにつれ、その選択が自分にどんな影響を与えたのかと疑い始めるかもしれません。こうした女性たちに、私はできる限りの優しさと力を込めてこう伝えたいのです。あなたたちは何も失っていません。尊厳も、愛される権利も、尊敬と真摯で優しい愛に満ちた目で見られる能力も。何も悪いことはありません。あなたに対して、あの時も今も、決してそうではありません。理解もせずあなたを判断する人たちは、ただ自分の限界を露呈しているだけで、あなたの限界ではありません。あなたは情熱と敬意と詩情をもって愛されるに値します。あなたがしたこと「関わらず」ではなく、あなたが持っていた勇気があるからこそ、なおさらそうなのです。なぜなら、自分自身をさらけ出し、世界に恥じることなく「これが私です」と言うことは、単に肌をさらけ出すだけでなく、魂をさらけ出すことだからです。そして、それもまた、深く人間的で、深く価値のあることです。だからといって、そのような選択を軽々しく行うべきだと言っているわけではありません。先ほども述べたように、「問題が社会的スティグマであるならば、解決策はポルノを禁止することではなく、ポルノを取り巻くメンタリティを変えることです」。しかし、その目標はまだ遠く、完全に達成されることはおそろくないでしょう。スティグマは存在します。もし自分があまりにも脆くて、それを軽々しく、平和に受け止められないと感じるなら、それを無視するのは賢明ではないと思います。しかし、それはこの経験をした人の価値とは何の関係もありません。

3.3) 恐怖他人の自由

私自身、ほとんどの人と同じように、感情的にも性的にも一夫一婦制を貫き、プライベートな生活を送っています。自分のセクシュアリティを違った形で生きることに興味はありません。しかし、だからといって、自分とは異なる選択をする人（例えば、ポルノグラフィーの特徴である乱交や露出癖）に対して優越感を感じるわけではありません。エクストリームスポーツに励んだり、自分がやらないような情熱に身を捧げる人に対して、自分が優越感を抱くこともないのと同じです。真に重要な唯一の基準は、当事者の自発的でインフォームド・コンセントです。なぜ、自分とは異なるセクシュアリティを生きる人に「私は正しく、あなたは間違っている」と言うべきでしょうか？ そのような立場を正当化する客観的原則は何でしょうか？ どのような意味で、私は道徳的に優れていると言えるのでしょうか？ 真の愛は性的表現によって脅かされることはありません。特に、セックスと愛はしばしば重なり合うものの、同じではないことを理解すればなおさらです。人は欲望のない感情的な関わり合いも、感情的な関

わり合いのない欲望も感じるすることができます。それは人間性の欠陥ではなく、人間の豊かさの一部なのです。私はまた、男性と女性の間、あるいは同性愛者の場合は同性同士の上に深い友情が生まれる可能性を固く信じています。まるで私たちの唯一の感情的な言語がエロティックであるかのように、あらゆる形の愛情や親密さを性的なものとして扱う必要性を感じる人がいるのを見ると、悲しくなります。ただ存在、忠誠心、そして相手のためにそこにいることの静かな喜びだけを求める絆には、この上ない美しさがあります。この短い余談は的外れではないと思います。哲学的思考とは、一見異なるテーマの間にある深いつながりを認識することでもあります。性的自由には、セックスをしない自由、深く非エロティックな絆を育む自由、あらかじめ定められたパターンにとらわれない情緒的な関係を築く自由も含まれます。ここで私は、特定のつながりを性的なものとして分類したり、カテゴリー分けしたりしなければならないという考え方に異議を唱えたかったのです。これは実際、ポルノを禁止したいという衝動の根底にあるのと同じ衝動、つまりラベル付け、カテゴリー分け、コントロールへの執着なのです。言い換えれば、これらの考察は個人的なものではあっても、深く重要です。なぜなら、他者の自由を尊重する能力は、人間関係の多様性を理解する能力から始まるからです。まさにこの豊かな人間経験こそが、私たちが判断する立場にないことを思い起こさせるはずなのです。

もし人が自発的にポルノグラフィーに出演することを選択し、その仕事に満足感を見出し、害を被っていないとしたら、真の問題は、それを他人が判断する立場にあるのかどうかです。それを「品位を傷つける」と私たちが言う資格があるのでしょうか？ 個人的な不快感に基づいて道徳を法制化しようとすることは権威主義的な精神に危険なほど近づき、個人の自由と私生活に対する国家の統制に関する、より広範な哲学的懸念を引き起こします。

ジョン・スチュアート・ミルは『自由論』の中で雄弁にこう述べています。

> ある人の行為のいかなる部分も、他者の利益に不利益な影響を与えるとすぐに、社会はそれに対して管轄権を持ち、それに干渉することで一般の福祉が促進されるかどうかという問題が議論の対象となります。しかし、ある人の行為が本人以外の誰の利益にも影響を与えない場合、あるいは本人が望まない限り影響を与える必要がない場合（関係者全員が成人で、一般的な理解力を備えている場合）には、そのような疑問を抱く余地はありません。そのような場合、行為を行い、その結果を受け入れるための、法的にも社会的にも完全な自由が与えられるべきです。

同様の議論は、個人の自律性に関する他の分野でも生じます。安楽死を考えてみましょう。十分な情報を得て同意した個人が、自らの苦しみを終わらせる権利を否定されるべきでしょうか？ あるいは、比較的最近まで、今日のポルノグラフィーに対して時折向けられるのと同様の道徳的議論に基づいて制限されていた同性愛を考えてみましょう。世界の一部の地域では、同性愛は依然として違法とされており、その多くは異性愛者の男性によって禁止されています（多くの状況において、女性はまだより寛容な傾向があり、文化的に後退的な国では、

そもそも女性が権力のある地位に就くことは稀です）。彼らは異性愛者だからこそ、男性との親密な関係しか許されない世界に閉じ込められることがどれほど苦痛なことかを理解し、それを理解しているのです。にもかかわらず、彼らはそれを理解しているにもかかわらず、レズビアン女性にまさにそれを押し付け、彼女たちが本来の姿に従い、自由に愛する権利を否定する権利があると感じている。無知からではなく、彼ら自身が決して耐えることを受け入れないであろうことを、他者に押し付けようとする意志からである。ポルノグラフィと同様に、これらの事例全てが明らかにしているのは、他者の自由に対する根底にある共通の恐怖、そして他者と異なるものに対する支配への執着である。

しかし、同性愛の自由を守ることが非常に重要であるからこそ、自己顕示欲に利用されることのリスクも認識しなければならない。近年、西洋の一部の文脈において、性的マイノリティの擁護を装いながら、擁護すると主張する人々の実際の幸福よりも、道徳的優位性を誇示することに関心を寄せているように見える人々が増えている。こうした力学は、しばしば美德よりも虚栄心によって動かされ、世論を遠ざけ、文化的疲労を生み出し、さらには同性愛者自身の生活を困難にさえする可能性がある。彼らは、恥ずかしさを感じ、誤解され、イデオロギー闘争の象徴に貶められるかもしれない。非常によく似た現象は反人種差別運動にも見られる。そこでは、正義ではなく注目を浴びることを求める声もある。尊厳と平等のための闘いは、エゴによって利用されるよりも、もっと良い形で行われるべきである。アレッサンドロ・マンゾーニがかつて指摘したように（『婚約者』第13章）、最も熱心な支持者でさえ、しばしば障害となることがある。

これは今も変わらない真実である。最も熱心な支持者でさえ、謙虚さと節度を欠くと、彼らが奉じる大義そのものの障害となることがよくあるのだ。

4) ポルノは人を物化するのか？

合意に基づく親密な枠組みの中で、性的に物化されることに真の性的充足感を見出す人がいることを認識することは重要であるが、「物化」という言葉はしばしば否定的な意味で用いられ、意志、尊厳、あるいは人間性の喪失を意味する。しかし、これらは根本的に異なる概念である。性的な物化は、自由に選択され、相互の尊重をもって経験される場合、非人間化と同じではない。前者は正当な個人表現の形態となり得るが、後者は自己への侵害である。

しかし、ポルノにおける物化について語るとき、私たちは本当に後者のことを指しているのだろうか？ 成人で同意のある人がポルノ制作を決意したとして、一体誰が彼らを「客体化」と言えるのでしょうか？ もしこの論理が正しいとすれば、モデルは美的感覚が評価されているから客体化されている、あるいはアスリートは身体能力が価値と結びついているから客体化されている、と言わざるを得ないでしょう。しかし、誰もこうした反論をしません。なぜなら、人間の価値は決して単一の次元に還元されないことは明らかだからです。さらに

ポルノはそれを実践する人の個性を消滅させるものではありません。むしろ、個人の個性を表現する手段となり得ないのはなぜでしょうか？

「客体化される」という表現自体が問題です。ポルノ出演者はマネキンや空っぽの殻として見られるのではありません。彼女が生きていて、そこに存在し、意識を持っているという事実こそが、シーンに意味を与え、エロティックなものにしているのです。欲望を掻き立てるのは、主体性の不在ではなく、彼女の意識的な存在、視線の背後にある意識、そして意図的に自分を見せるという行為なのです。彼女は客体化されているのではありません。彼女は、特定の美的コードを弄ぶことを選択した主体です。そして、その意図的な選択こそが、エロティックな見せつけと非人間化を隔てるものです。だからこそ、AIが生成したポルノは、いかにリアルであっても、現実のポルノと同じ価値を持つことは決してありません。これらは単なる画像ではなく、人間の存在、見られることを選んだ意識のある個人の表現なのです。ポルノにおけるAIの使用をめぐってまもなく浮上するであろう倫理的・感情的なジレンマは、パフォーマーが物としてではなく、意識のある個人として認識されていることを改めて証明するものです。もし彼らが真に単なる道具として見なされるなら、ポルノは人工的なレプリカへと移行するでしょう。しかし、私はそれが決して現実にならないと強く疑っています。人工的に生成された具象芸術は他の多くの分野では効果を発揮しますが、まさにポルノにおいて、人間的要素を代替することはできません工場、オフィス、カスタマーサービスなど、人間が交換可能な道具として扱われる分野があります。もちろん、自動化自体に問題があるわけではありません。人間の労働を機械に置き換えることは、多くの場合、進歩の証であり、倫理の失敗ではありません。しかし、それが何を意味するのかを認識しなければならない。機械の方が効率的に仕事をこなせるようになると、人間は道徳的なためらいもなく、まるでその存在に本質的な価値がないかのように無視される。真の客体化とはまさにこのことだ。逆説的に言えば、ポルノグラフィー（まさに人間を物に貶めていると非難される分野）においてこそ、人間の存在は代替不可能なのだ。そしてこの観察は、パフォーマーが物として見なされているという主張の誤りを浮き彫りにする。もし本当にそうであれば、AIによるレプリカで十分すぎるほどだ。言い換えれば、客体化の非難が強まるところでは、実際には人間のかけがえのない存在がより強く認識されているのだ。

現実には、ポルノグラフィを「客体化」していると非難する人々は、しばしば女性のセクシュアリティを烙印を押すためにそうしている。なぜ、自分の体を露出することを選んだ女性が「物に貶められ」、隠す女性が「立派な」と見なされなければならないのだろうか？ こうした考え方は女性を守るどころか、幼児化させる。真の尊重とは、女性に何をして良いか悪いかを指図することではなく、女性が自ら決定する能力を認めることである。ポルノを作ることも、尼僧になることも、どちらも正当かつ深く尊重されるべき選択である。一方を尊重し、他方を尊重しない人がいるのは憎むべきことである。どちらも自己定義の一形態であり、自由に選択されたものである限り、どちらが高貴か低貴かということはない。

ポルノグラフィが人間を物に貶めていると非難するカントの言葉を持ち出す人もいる。しかし、まさに彼の最も高貴な原理、すなわち、すべての人を単なる手段としてではなく、目的として扱うよう命じる原理こそが、この議論の欠陥を露呈している。もしある人が、自らを十分に認識した上で、人生の目的の一つに露出が含まれていると感じているなら、その人は物ではありません。自らの身体とセクシュアリティについて決定を下す一人の人間なのです。その人に対する道徳的尊重とは、その選択を抑圧することではなく、尊重することです。その人自身が自らのものとして認識していない、支配的な社会的なセクシュアリティモデルを支持するという名目で、その人の自由を否定することは、その人を、その人自身の目的としてではなく、共有していない目的（つまり、セクシュアリティに関する集団的かつ道徳的なビジョンの維持）のための手段として扱うことを意味します。そして、これはまさに、人を客体化することを意味します。

たとえ自律性と同意を認めたとしても、ポルノグラフィはしばしば一種の客体化を伴い、それだけでも人を単なる手段として扱ってはならないというカントの原則に反する、と反論する人もいるかもしれません。しかし、この見方には大きな疑問が残ります。自己を十分に理解している成人がポルノグラフィに参与することを許すとき、私たちは彼らを強制したり欺いたりして望まないことをさせているのではなく、彼らが欲求を満たし、彼らにとって大切な自己表現の形態を追求することを許しているのです。

人が意識的に他者の視線に身を委ねることを決意するとき、たとえそれがエロティックな客体化を伴う形態であっても、彼らは手段に貶められているわけではありません。彼らは目的を選択し、主体性を行使しているのです。そのような場合、身体は言語、表現形態、さらには文化的あるいは実存的な声明となります。たとえ象徴的に私を「手段」の立場に置くような役割を自発的に引き受けるとしても、私は主体であり続けます。私はその瞬間の作者なのです。私はカントの命法を、エロティックな役割や芝居がかった演出の禁止ではなく、特に自由が型破りではあっても倫理的に無害な形をとるときに、個人の主権を尊重するよう求める呼びかけだと捉えています。要するに、歌手やダンサーのように、欲望されたり快楽を提供したりすることは、物であることと同じではない。

もし歴史上のカントを21世紀に連れ出し、ポルノグラフィについてどう思うかと尋ねたら、おそらく彼は恐怖を覚えるだろう（そしてミルについても同じことが言える可能性も否定できない）。その反応は、彼の道徳哲学の中核原則ではなく、当時の文化的・性的な規範によって形作られるだろう。だからこそ私は、彼の主要な倫理的思想を現代の文脈に適用するには、時には彼の個人的な判断から逸脱する必要があると主張する。課題は、カントの結論に従うことではなく、彼の道徳的方法、すなわち人格を目的と見なし、普遍的な法則として意志できる原則のみに基づいて行動することに忠実であり続けることだ。あらゆる人間に宿るあらゆる矛盾を抱えながらも、カントはある意味でミルを数十年も先取りしていたと私は信じている。彼はこう書いている（「古い格言について：理論上は正しいかもしれないが、実際にはうまくいかない」より）：

> 誰も、他人の幸福に関するその人の考えに従って、その人のやり方で私を幸せにするよう強制することはできない。むしろ、誰もが自分にとって最善と思われる方法で幸福を追求することができる。ただし、他者が同様の目的を追求する自由、すなわち、あり得る普遍法の下ですべての人の自由と共存できるあらゆることを行う他者の権利を侵害してはならない。

もちろん、カントの性に関する見解は複雑であり、私の専門は哲学ではなく物理学です。私は、カントの主要原理を誠実に哲学的に解釈し、現代の文脈に適用しただけです。現代の文脈では、道徳的課題は変化していますが（ここで言及する多くの現実には、カントの時代には存在せず、想像もできませんでした）尊重、自律性、そして私たちの行動が世界に与える影響への意識の必要性は変わりません。あえて言えば、歴史上のカントがポルノグラフィを拒絶したであろうことは、彼の哲学の核心に反するでしょう。それは、すべての人を単なる手段としてではなく、目的として扱うという命題と、普遍的な法則となるように合理的に意志できる原則（この場合、他者を尊重する限り、私たちが共有しないかもしれない個人的な選択も尊重されるべきであるという原則）の両方においてです。私がここで行っているのは、彼の思想の進化した解釈、つまり倫理的な本質を保ちつつも、かつての時代の性嫌悪的な道徳主義を拒絶する解釈を検討することです。誰かを人生の目的として扱うことは、その人の人生を強制することではなく、人生を選択する能力を尊重することです。

5) ポルノは孤独を搾取するのか？

ポルノは孤独を搾取していると主張する人もいますが、少なくとも2つの理由から、この主張は根拠に乏しいと言えます。

- i) まず、ポルノは孤独な人だけを狙ったものではありません。幸せで深い絆で結ばれた関係にある多くの人々が、共有体験としてポルノを楽しんでいます。
- ii) 第二に、すべての産業は人間のニーズを満たすために存在します。農業は飢餓を搾取しているのでしょうか？ 医師は病気を搾取しているのでしょうか？ そう表現するなら、その通りです。しかし、これはあらゆる職業に共通する特徴です。私たちが仕事に行くたびに、まさにニーズを満たすために行っているのです。そして、これは一般的に、真に崇高な行為です。

これらのニーズは、タバコ、アルコール、ファストフード、甘い飲み物、低品質のテレビなど、時には全く健全ではありません。しかし、アルコールやタバコのような物質とは異なり、少なくとも意識的に、敬意を持って体験する限り、ポルノは自然で健全なニーズと結びついています。真の問いは、ポルノを禁止することで実際にどのような問題が解決されるのか、ということです。ポルノを禁止することで、恋愛関係のない男女の生活はどのように改善されるのでしょうか。孤独の問題に関して唯一懸念されるのは、稀なケースですが、精神的に脆弱な人がポルノが人間との接触に取って代わる可能性があると感じるようになるかもしれないということです。しかし、既に 1.2 節で議論したように、少

数の人がポルノを乱用するリスクがあるからといって、すべての人の自由を抑圧することが正当化されるわけではありません。

結論として、すべての使用が同じように健康的であるとは限りません。食べ物や過と同様に、題は を引き起こす可能性があります。しかし、これはポルノ自体の欠点ではなく、すべての快樂にはバランスと意識が必要であることを改めて認識させるだけです。

6) 「もし彼女があなたの母親だったら？」という議論

これは感情的な誤謬の典型的な例です。近親者が関与しているからという理由で行為が受け入れられないという考えは、合理的な議論ではなく、感情的な反応です。もし私の母がポルノ女優だったら、それは彼女の選択です。弁護士、アスリート、あるいは芸術家になることを選んだのと同じように。しかし、なぜそれが私にとって問題になるのでしょうか？もし彼女が自由にその道を選んだのなら、私が反対する合理的な根拠は何でしょうか？唯一の真の問題は、彼女がそれを望んでいるかどうかです。もしあなたの母が K2 に登りたいと言ったらどうでしょう？それは当然のことながら、私を本当に怖がらせるでしょう。なぜなら、リスクは命に関わるからです。それでも私は*甚だしく不当*だと感じますが、少なくとも、安全上の理由から国がそのような高リスクの活動を禁止しようとする理由は理解できます。しかし、ポルノグラフィはどうか？多くの人間の経験と同様に、感情的および倫理的な複雑さを伴うかもしれませんが、自由に選択されたものであれば、本質的に有害ではなく、安全上の脅威のように扱われるべきではありません。要するに、「もし彼女があなたの母だったらどうでしょう？」という質問に対する答えです。差別的な意図を持った非難を誇らしげに覆したチャーリー・チャップリンと同じように、私はこう答えるでしょう。「私にはそんな名誉はありません」。家族の一員が特定の活動に従事しているという事実が、その倫理的性質を変えることはありません。

7) 「もし彼女があなたの妻だったらどうしますか？」という議論

前のセクションで述べたことの多くはここにも当てはまりますが、この反論はより深く切り込んでいます。それは公道徳ではなく、より親密なもの、つまり二人の間の感情的な絆に訴えかけるものです。これは社会が何を許容するかではなく、ロマンチックな愛が何を理解し、受け入れることができるかということです。そして、まさにそれが、この反論に同等の哲学的配慮に値する理由です。

これは、私が個人的に人間関係、信頼、そして自由をどのように理解しているかについて考えるきっかけとなりました。これは単なる不適切な余談ではなく「もしそれがあなたの妻だったらどうしますか？」というポルノに対する反論に対する哲学的な反応は、必然的に愛とパートナーシップをどのように捉えるかに依存するからです。以下は個人的な逸話ではなく、個人的なレンズを通して説明されながらも、普遍的な人間の現実を語ることを意図した一連の一般原則です。後で明らかになるように、この見方は狭量でも規範的でもありません。

あらゆる視点と感情的な感受性のための余地を残しています。私の人間関係に対する見方は、所有権ではなく、信頼と相互尊重に基づいています。妻の身体は私の所有物ではありません。彼女のものであります。もし彼女がそのような選択をするのであれば、それは彼女の決断であり、私の役割はただそれを尊重し、彼女の気持ちを理解することです。愛とは支配ではなく、相手の自由を恐れることでもありません。愛とは信頼であり、共犯であり、愛する人が彼女にとって納得のいく方法で自己実現を遂げるのを見たいという願望です。とはいえ、オープンさと誠実さはどんな関係においても基本です。私は愛を所有物とは考えていませんが、相互の信頼に基づくパートナーシップだと考えています。もし妻が私に何も知らせずにそのような決断をしたとしたら、それは裏切りです。選択そのものの性質上ではなく、私たちの関係を支える信頼の基盤を侵害することになるからです。透明性は不可欠です。夫婦における真の自由とは、一方が他方のことを考えずに好きなことをすることではなく、相互理解と尊重をもってオープンに選択することです。

恋愛関係において、セックス（そしてより広い意味では、肉体的な親密さや触れ合い）と愛は絡み合うこともあります。それらは同じではありません。心を捧げることなく、体を分かち合うことはできます。そして、触れ合いを求めずに、愛の豊かさを捧げることでもあります。私たちは皆、輝かしく永続的な、そして全く性的な意味を持たない愛で大切にしている人がいます。親密さは必ずしも触れ合いだけではありません。時には、存在、忠誠心、あるいは知られていることと関係することもあります。

ポルノグラフィーに出演する女性は幸せで愛情深い関係を築けないという考えは、偏見であり、現実ではありません。彼女がそれを職業にしようと、あるいは人生で一度だけ自分のこの側面を探求することを選んだとしても、それは何ら変わりません。恋愛の絆は、性的な経験ではなく、存在、そして二人の魂の繋がりによって測られます。愛は親近感、支え合い、そして優しさから成り立つものであり、「純潔」の証明書によって決まるものではありません。ポルノで一度か何度も性的な描写がされたというだけで、女性は同じ情熱と献身をもって愛されないと考える人は、愛について何も理解していない。

女性は、屈服、露出、そして表に出るといった幻想を含む、最も大胆で、生々しく、タブー視されるような性的な表現を探求したとしても、優しさ、忠誠心そして尊敬の念をもって受け入れられる。一度か何度も自分の体を世間に見せたとしても、彼女は誰かのミューズ、誰かの拠り所、誰かの家となることができる。そうではないと主張する人は、愛と所有物、尊厳と服従を混同している。真の愛には様々な形がある。その一つは、恐れではなく、優雅さをもって自由を受け入れることだ。

批判的な世界で、たとえ短時間でも、自分をさらけ出すには強さが必要だ。他人に指をさされても、自分の真実を受け入れるには強さが必要だ。その強さは道徳的な欠陥ではない。それは勇気の種類だ。そしてその勇気、その輝かしい誠実さは、深く美しいものだ。それは恥ずべきことではなく、賞賛に値する。

それは冷たさで迎えられるべきではなく、隠れろと言わず、光の中であなたのそばに立ち、人生の嵐を通してあなたを支えてくれるような愛で迎えられるべきです。

感情的な一夫一婦制と性的排他性は、しばしば結び付けられながらも、明確に区別される二つの概念です。人は、感情的にはパートナーにのみ献身しながら、自分の身体を共有することが可能です。性的排他性が間違っていると言っているわけではありません。むしろ、多くのカップルにとって、それは完全に正当で価値のある選択です。しかし、この点において真に重要なのは、パートナー間の相性です。すべてのカップルは、社会的なプレッシャーに左右されることなく、自分たちの好み、境界線、そして相互理解に基づいて、自由に独自のルールを定めるべきです。性的な忠実さを不可欠と考える人もいれば、個人の自由をより重要と考える人もいます。重要なのは、パートナー同士が一致し、どちらも自分の考えを相手に押し付けないことです。もし二人がこの点に関してニーズの不一致に気づいた場合、どのように対処するかは二人で決めるべきです。とはいえ、私の立場は「下心」から来るものではないことを明確にしておきたいと思います。私は婚外関係に興味はありません。しかし、だからといって所有権を信じているわけではありません。彼女の自由を尊重することだけを信じているのです。私自身の自由を主張するつもりはありません。私にとって愛とは、相手の幸せを願うことです。妻と彼女の人生の充実を邪魔する存在にはなりたくありません。私たちの関係は、共謀と相互信頼の上に築かれたものであり、不安や押し付け、支配に基づくものではありません。私たちは、自分たちの本質を反映するものとして、自由に一夫一婦制を選びました。しかし、だからといって、妻が深く大切だと感じていることを私が禁じる権利があるとは思いませんし、性的に排他的ではない関係が、より深く、誠実で、真摯なものだとも思いません。重要なのは、夫婦が性的に一夫一婦制を選ぶかどうかではなく、その絆が相互の尊敬、同意、そして理解の上に築かれているかどうかです。たとえ肉体関係が離れ離れになっても、心は離れない人もいます。性的に一夫一婦制は、愛の唯一の形ではありません。関係を築く唯一の方法でもありません。つまり、大人同士が自由に行うあらゆる選択は尊重されるべきです。なぜなら、重要なのはまさにこれです。誰にも、他人に「正しい」愛の仕方を指図する権利はないからです。

8) 「でも、女性はそんなことをしたいはずがない」という議論

私たちが決して共有できない感情、信念、欲望というものは存在します。しかし、だからといってそれらが現実的でなくなったり、尊敬に値しなくなったりするわけではありません。時に、ほとんどの人が理解できないようなことをする人がいます。レーシングドライバーはその顕著な例で、彼らの多くはレースのために莫大な金額を費やして人生を費やしています。実際には、彼らは命を危険にさらすためにお金を払っているのです。他人が全くの狂気と見なすものを深く愛する人がいることを、これほど明確に示すものはありません。

一般的な性的欲求を持つこと、あるいは全く持たないことは、何ら悪いことではありません。そして、私たちがそれらの経験を尊重するのと同じように、異なる形の欲求（例えば、人目につきたいという欲求、ポルノに見られるような露出症のように、自分の官能性を公然と共有したいという欲求など）を持つ人々にも敬意を払い、私たちが完全に理解したり共有したりできないかもしれないことを認める謙虚さを持つべきです。重要なのは、欲求が社会規範に適合しているかどうかではなく、合意、認識、そして相互尊重をもって探求されているかどうかです。

この点を踏まえ、少し立ち止まって、ポルノグラフィーに対するこの特定の反論の意味について考えてみましょう。それは、成人同士の合意に基づく露出的な空想を、それが軽度であろうと強烈であろうと、単に存在しないという主張です。この主張は単に間違っているだけではありません。人類の心理的多様性を考慮すると、あまりにも極端であり、まさに滑稽の域に達します。しかし、何よりも最悪なのは、ポルノグラフィーに対するあらゆる反論の中で、この反論は群を抜いて倫理的に忌まわしく、不快で、非人間的なものであるということです。これはポルノグラフィーに対するすべての批判を非難するものではありません。中には重要な懸念を提起するものもあります。私が倫理的に忌まわしいとして拒絶するのは、女性が自由にポルノグラフィーを欲望できるという主張です。これは単に間違っているだけでなく、道徳的に言語道断です。誰かの生き方はあまりにも受け入れがたいものであり、人間の可能性の領域から消し去らなければならない、と告げることほど残酷なことがあるのでしょうか。彼らの欲望はあまりにも非合法であり、想像することさえできない、と告げることほど残酷なことがあるのでしょうか。これは単なる支配ではありません。一種の殲滅であり、自由だけでなくアイデンティティそのものを消し去ろうとする試みです。

だからこそ、女性の自由を理論上容認するだけでは不十分であり、たとえそれが社会的なスティグマを招くような形をとったとしても、実践においてそれを擁護しなければならないのです。女性の自己決定権を信じるならば、ポルノ制作の権利も尊重されるべきです。そうでないと主張するのはフェミニズムではなく、女性蔑視です。女性を守ると主張する人たちはいますが、恐怖と検閲の層の下に欲望を覆い傾さざるを得ない女性たちの沈黙の叫びに耳を聞いていません。彼女たちは、自由にセクシュアリティを表現することが罰せられ、犯罪化される社会に生きています。もちろん、ポルノのような抑圧を通してでも、そして、それは解放ではなく、自由の冷酷な窒息です。この沈黙の叫びは存在しますが、女性を守ると主張する人々の道徳的な偽善によってかき消されてしまいます。「美德」が迫害を正当化するために利用されるとどうなるか、私たちは見てきました。キリストでさえ、正しいことをしていると信じていた群衆によって十字架につけられました。歴史は、美德の名の下に犯された悲劇に満ちています。

ポルノグラフィーに出演することを好む女性たちがいる。しかし、女性の自主性を少しでも表現しようとする、暴力的に罰せられるような場所に生まれた

のだ。彼女たちが苦しんでいるのは、ポルノのせいではなく、ポルノを受け入れることを禁じられているからだ。法律によって、あるいは烙印によって沈黙させられているのだ。もし私たちが真に自由を信じるならば、女性が性を見せたり隠したりする権利を守らなければならない。性的な側面をオープンに表現することも、プライベートに生きることも、あるいは全く表現しないことさえも。自由とは選択であり、強制ではない。こうした女性の存在を否定することは、プライバシーの侵害に苦しむ他の人々を否定するのと同じくらい盲目的である。どちらの苦しみも、性的自由の否定から生じている。ただし、その方向は正反対である。一つは望まれない露出（このテーマについては既に第2章で考察した）から、もう一つは望ましい表現の抑圧から生じている。どちらの現実にも、私たちは十分に注意を払うべきである。

女性を守るためにポルノを禁止すべきだと主張する人々に問いたい。あなたは本当にすべての女性と同じことを望んでいると信じているのか？自分の欲望を生きる権利を否定され、沈黙の中で苦しんだ女性は一人もいないと信じているのか？この地球上の何十億もの命の中で、鮮明な露出狂的な空想を抱き、自分の思い通りに見られ、賞賛され、欲望されることを切望するあまり、恐れや恥辱を感じることなく、ありのままの自分でいられる自由を切望し、夜も眠れない女性が一人もいないと、あなたは本当に信じているのか？さらに悪いことに彼女は自分の根底に欠陥があると思い込み、苦しんでいる。自分の欲望は逸脱している、空想は恥ずべきものだ、自分自身は隠すべきものだ、と。しかし、彼女には何も悪いところはない。彼女は他の誰とも同じように尊厳と自由を持つに値する。もしかしたら、彼女は世界に向かってこう語ることが夢見ているのかもしれない。「これが私。私は存在する。私はこう。そして、私は恥じない。」（全く同じ言葉は、敵対的な環境の中で信仰を告白する勇気のある信者や無神論者によって発せられるかもしれない。）それでも彼女は苦しんでいるまさに、どこかで誰かが彼女の自由を奪おうと戦っているからだ。

結論

この回答は、ポルノグラフィを無批判に擁護するものと解釈されるべきではない。ポルノグラフィは特定の状況においては確かに有害となり得る。むしろ、個人の自由を侵害するものとしてポルノグラフィを禁止することに反対する強力な論拠として解釈されるべきである。ポルノグラフィに関連する問題、例えば精神的に脆弱な個人への影響の可能性などが存在することを否定するものではない。しかし、危害の可能性を認識したからといって、禁止を正当化するわけではない。他の多くのツールと同様に、ポルノグラフィは本質的に善でも悪でもない。その価値は、どのように、そして誰によって使われるかによって決まる。この意味で、ポルノグラフィは、責任を持って使われれば有益だが、誤用されれば有害となる無数の他のものと何ら変わりはない。

結局のところ、核心となるのはポルノそのものではなく、民主主義社会が他者の権利を侵害しない合意に基づく行為に道徳的な制約を課すべきかどうかという、より深い問いです。真の性的自由とは、欲望を表現する権利と、そこから

逃げる権利の両方を守ることを意味します。大胆な人も静かな人も同じように守ることを意味します。この原則は性だけにとどまりません。自由な社会の真価は、私たちが尊敬するものをどれだけ守るかではなく、尊敬しないものをどれだけ公平に扱うかによって決まるのです。

自由は、あらゆる尊厳ある生活の基盤です。チャーリー・チャップリン（人類への演説）の言葉を借りれば、「私たちは、何をすべきか、何を考え、何を感じるべきかを指図する者たちに、身を委ねてはならない！」ということです。だからこそ、これは単なる画像やスクリーンに関する議論ではありません。人間の尊厳、自律性、そして他者がそれぞれ異なる存在であることを許容する道徳的勇氣に関する議論なのです。そして、その観点から見れば、答えは明らかになります。

合意に基づく性的自由を禁じることは、単に特定の個人を抑圧するだけではありません。近代民主主義の根干そのものを裏切ることになります。本書で擁護されている思想は、ヨーロッパ啓蒙主義、すなわち個人の自由は他者を尊重しつつ、十分に享受されるべき自然権であるという信念に根ざしています。しかし、自由と幸福の追求は権利であると法律で明文化する勇氣を持ったのは、海の向こう、18世紀後半のことでした。そして、その勇敢な（しかし、極めて不完全な）行為に、私たちは多大な恩恵を受けています。さらに、今日でもこのような文章を書き、他の人々がそれを読むことができる国があるのは、たとえばたった一つの声であっても、自由を守る価値があると信じた人々の血と勇氣、そして犠牲のおかげです。暗い時代において、彼らは私たちの自由のためにすべてを危険にさらすことを選びました。彼らは必ずしも発言の内容に同意したわけではありません。しかし、彼らはそれを発言する権利を信じていたのです。

自由は、型にはまった人々の特権ではありません。それはすべての人間の生得権です。

クアッソ・アル・モンテ、2025年夏

著者ノート

妻に感謝したいと思います。山や湖畔を散歩したり、ピザを食べたり、中華料理を味わったりする合間に、私はしばしばこれらの（そして他の多くの！）哲学的な問いについて語り合う喜びを分かち合ってきました。それらの瞬間も、この文章の一部です。これらの会話は、物理学や数学への深い愛情以上に、私の人生で最も大切にしているものの一つです。彼女の存在、優しき、そして思慮深い世界の見方は、私にとって真の喜びの源です。